

連続セミナー「演劇言語の探求」報告(前)

佐藤 康
(学習院大学)

演出家の時代の陰に現代の演劇作家の姿が埋没し、同時代劇のお株を古典再解釈に奪われてしまった観のあるこの数十年、今ふたたび時代の振り子は戻り、劇作家の時代が再来したと言うのは早計であるが、しかし確実に地下の水脈では何か蠢き始めている。翻訳可能性の問題—実はこれこそが最大の問題なのだ—ともさしあたり折り合いをつけながら、その水脈にボーリングを入れてみよう、というのが本セミナーの眼目である。翻訳にあたった筆者が、手探りながら簡単な紹介の弁をとり、作品のリーディングを抱き合わせにして、結びに参加者とも意見交換をするという構成で、全5回にわたり連続セミナーが開かれた。

第1回「空白の30年」2005. 9. 27

初回は具体的な作品を取り上げず、70年代初めまで続いていた、日本でのフランス現代演劇作品の、ほぼリアルタイムな上演が断ち切られてしまった事態を検証し、その背景を考察した。単純化の誹りを覚悟でかいつまめば、68年以降の演劇状況の中で、たとえば太陽劇団が行ったような集団作業が、従来の劇作家を頂点とした演劇作業のパラダイムを転換させたこと。活発化した国際演劇交流が、フランスに言葉ではなく身体の演劇を発見させたこと。50年代のプレヒテイスムの影響から発した「読解の演劇」が、演劇テキストの「素材化」を招き、その結果、戯曲の特権性を解消させたことを挙げ、総じて現代作家の疎外状況がもたらされたことを示した。

この状況(とは無関係に書き続ける作家はそれとして)に根を下ろして、新しいタイプの演劇言語を探求する動きが出てきたのが、ほぼ80年代に入ってからだろう。そのエクリチュールの輪郭がようやく見え始めてきた。

第2回 ジャン＝リュック・ラガルス『他人の場所』2005. 10. 18

ラガルスはこうした劇作家の疎外状況の中、中央の劇界から生前ほとんど知られることなく、HIV感染という、いまひとつの疎外をも生きて夭折した。晩年近い作品にはそうした主題を繊細な詩的言語に昇華させたものが多いが、初期の作品はむしろイヨネスコの影響から出発した小品が多い。今回取り上げた『他人の場所』(*La Place de l'autre*)もそのひ

とつである。青年と少女が、おそらくは病院の中庭と思しきベンチで語り合うという設定だが、二人の関係は正確には定めがたい。少女の口からは、自分が大手術を受けたことが語られる。青年は少女の裸に触りたいというフェティシズムを繰り返す。看護婦に腹を殴られて口を開けたところへキャンディーを放り込まれるというエピソードが、そのまま青年によって少女に対してなされる。不思議な明るさの中に、男女関係の本質を寓意的に描いた佳品であろう。(リーディング 朝倉朋美、清水勇斗)

第3回 ミシェル・アザマ『隔壁』2005. 11. 1

80年代に創作を開始した作家にはモノログ作品が多い。コルテスが先鞭をつけた傾向であるが、新進作家にとって上演しやすいという物理的な条件も一因であろう。いずれにせよモノログの隆盛は、会話に基づく戯曲の中を生きる身体から、何事かを語り続ける身体へと、演劇の地平を拡大させた。『隔壁』は夫を殺害して16年の刑に服した女性が、釈放になる前夜に経験する内面を語る作品である。語り手の脳裏には、入所時の光景や刑務所での生活、裁判の様子や子供との面会などの様子が次々によみがえる。ポリフォニックな構成のエクリチュールであるため、上演は一人の俳優でも複数の俳優でも可能である。釈放される喜びが次第に、社会に戻る不安と恐怖へ反転するなか、朝が来る。作者は実際に刑務所でのワークショップのなかで素材を取材して作品を書いた。(リーディング 平田朝音)

活動報告

2004年度

- 04年10月27日 講演会「コルテス、その才能の諸地平」
講演者：アンヌ・ユベルスフェルト(於：日仏会館)
- 04年12月8日 講演会「現代におけるフランス演劇の地平」
講演者：渡邊守章(於：学習院大学)
- 04年12月8日 2004年度総会(於：学習院大学)
- 05年3月26日 ビデオ・セミナー「『綿畑の孤独のなかで』を観る」
解説：佐伯隆幸(於：日本大学)

2005年度

- 05年4月16日 2005年度総会(於：日仏会館)
- 05年4月16日 講演会「クロード・ロラン没後50年——研究・翻訳・公演」
講演者：渡邊守章(於：日仏会館)
- 05年5月20日 講演会「パリの舞台より——2004/5の記憶」
講演者：白井春人(於：学習院大学)